

女性事務員たちの〈成長〉の行方

―源氏鶏太「向日葵娘」論―

坂 堅 太

はじめに

一九二四年一月に実業之日本社より刊行された『新らしい外来語の字引』には「サラリー」という項目がたてられており、そこには「俸給。サラリー、マン (Salary man) は俸給生活者である」と書かれている⁽¹⁾。この記述からもわかるように、遅くとも大正末期には、「サラリーマン」という語は日本社会に定着していたと考える⁽²⁾。そして昭和の初め、特に世界恐慌前後の論壇では、マルクス主義の高揚を背景とする「知識階級論」の一ヴァージョンとしてサラリーマンに関する論考が数多く発表され、一九二八年には『サラリーマン』という雑誌も創刊されている⁽³⁾。こうして「サラリーマン」という存在への社会的関心が高まっていた一九二〇年代末、文学においては浅原六朗が「或る自殺階級者」(『新潮』一九二八・七)や「ビルデキングと小便」(『中央公論』一九二九・四)など、「資本家にもなれず、労働者にもなれない蒼

白きインテリ」としてのサラリーマンを描いた小説を発表していた⁽⁴⁾。

ただし、一つのジャンルとして「サラリーマン小説」と呼ばれるものが成立したのは、それから約二〇年が経過したアジア・太平洋戦争後であると一般には見なされている。そしてこのジャンルを開拓した作家とされるのが、一九五一年に第二五回直木賞を受賞した源氏鶏太である。「今の人人には思いも及ばぬだろうが、昭和二十三年頃までに、サラリーマンの世界を描いた小説は、皆無に近かった」とする源氏は⁽⁵⁾、次のようにも語っている。

今では、誰でもがサラリーマン小説を書くようになっていて。しかし、その頃、サラリーマンを主人公にした小説があつても、そのサラリーマンの仕事上の悩みとか、対人関係の苦痛、仕事への生甲斐などをテーマにした小説は、殆んど皆無といつてよかつた。私自身も、そういうことは不可能のように思い込んでいた。⁽⁶⁾

ここで源氏は「サラリーマンを主人公にした小説」と自らの「サラリーマン小説」との違いを説明するにあたり、「サラリーマンの仕事上の悩み」などをテーマに据えたか否か、という基準を持ち出している。すなわち、オフィスという彼等の職場に固有の問題、その日常的な経験に焦点をあてたことが、源氏のサラリーマン小説の革新性であつた、ということになるだろう。

一方で源氏には、サラリーマンとは異なる視点でオフィスという空間を描いた作品が存在する。それが女性事務員たちを主人公とする、いわゆる「B G (ビジネス・ガール) 小説」と呼ばれるものである⁽⁷⁾。源氏にとって最初のB G 小説とされる「向日葵」(『婦人生活』一九五二・一〜一二)について、彼は次のように回想している。

いわゆるB G 長篇小説としては、私の第一作に当る訳である。過去、B G 長篇小説はなかつた。それだけに私は、何にとらわれることもなく、未開地を開拓していくように奔放に書くことが出来たように思っている。⁽⁸⁾

このようにB G 小説の開拓者でもあると自負する源氏は、この作品以降も「緑に匂う花」(『講談倶楽部』一九五二・七

「一九五三・六」、「丸ビル乙女」〔平凡〕一九五三・八―一九五四・一)など、女性事務員を主人公に据えた小説を継続的に発表している。

では、サラリーマン小説とB G小説とを比較した際、そこでのオフィスの描かれ方にはどのような違いを見いだせるのであろうか。その違いは何を意味していたのか。本稿では源氏の初期B G小説の分析を通じこれらの問いを考察していくが、同時に、サラリーマン/B G表象がどのように関係づけられていたかについても考えたい。女性事務労働者の歴史的経験に着目し労働の場におけるジェンダー規範の変遷を跡付けた金野美奈子は、職場における「女性」カテゴリーの創出がつねに、それと対をなす「男性」カテゴリーの構築を伴うことを指摘している⁽⁹⁾。これに従えば、B Gという表象は、その対立項であるサラリーマンとの対照により輪郭づけられていたと理解できる。では、その対照性とはどのようなものであったのか。

源氏のB G小説については、女性週刊誌の言説との響き合いという視点から分析した井原あやの議論や⁽¹⁰⁾、「ロマンス小説」という枠組からその受容のあり方を考察した金岡直子の研究がある⁽¹¹⁾。本稿もこれらの成果から大きな示唆を得ているが、一方、そこで取り上げられてきたのは一九六〇年代に発表された作品群であり、一九五〇年代前半の初期B G小説については論じられてこなかった。戦後日本の女性労働史を素描した熊沢誠は、高度経済成長以前の昭和二〇年代について「作業の機械化と標準化の程度がそれほどでなかったことが、職場の性別分業をのちの時期ほどには明瞭にさせていなかったようにみえる」とし⁽¹²⁾、高度経済成長期前後に転換が生じていたことを指摘している。これを踏まえ、本稿では源氏の初期B G小説に焦点を当て、それが高度経済成長以前の職場のジェンダーをどう描いていたかを考察していく。ここからは、高度経済成長期以降の企業の動きを先取るかのように、恋愛というモチーフにより職場のジェンダー矛盾を覆い隠していくB G小説の姿が明らかとなるだろう。第一節では一九五〇年代前半に発表された源氏のサラリーマン小説と

BG小説との比較を通じて、オフィス空間の描かれ方にどのような違いがあったかを概観する。そして第二節以降では最初のBG小説とされる「向日葵娘」を分析し、女性事務員たちの職業経験がどのように意味付けられていたかを論じていく。

一、「オフィスラブ小説」としてのBG小説

本節では源氏の初期サラリーマン小説とBG小説との比較を行っていくが、まずはサラリーマン小説の特徴を概観することから始めたい。「源氏のサラリーマン小説の明るさは、戦後民主主義の明るさである」¹⁰³、「占領期を通過した戦後の価値観」に裏打ちされた「明朗サラリーマン小説」¹⁰⁴、といったように、源氏の作品については〈明るさ〉をその特徴とする指摘が多い。ただしこれらの議論は基本的には代表作『三等重役』（『サンデー毎日』一九五一・八・一二）一九五二・四・二三）に依拠したものであり、同時期の他の小説を見渡せば、こうした評価には収まらない姿が見えてくる¹⁰⁵。たとえば初期のサラリーマン小説の一つである「颱風さん」（『オール読物』一九五一・四）では、上司から無理難題を頼まれたサラリーマンが「世間には会社員なんて、いちばんのん気でもいい勤めのやうにいふが、今日から僕は反対するね。時によつたら、怪我どころか生命の危い仕事だつてさせられる。要するに資本家なんて、ただ月給をくれてあるといふ訳ではない」と呟く姿が描かれている。「たとへ嫌でも憂鬱でも、妻子を養ふ月給を貰つてゐるからには」、どのような仕事でも引き受けざるを得ない。そうした勤め人たちの悲哀を掬い上げた点にこそ、源氏の初期作品の特徴がある。「ペーソスには富んでいる」¹⁰⁶、「底にペーソスがあることによつて生きる作柄」というように¹⁰⁷、当時の評価言説では「ペーソス」という語が多用されていたことも、こうした事情を物語つていよう。一九五〇年代初頭に発表されたエッセイで、源氏は以下のように書いている。

サラリーマン稼業ほど、しがたない職業はありません。毎日が泣きの涙です。いつそやめてしまひたい、と思ふことがしよつちゆうです。しかし、それをやめたら、明日から喰つていけない、と云つた能なしであることが、即ち、サラリーマンの特色です。それだからと云つて、サラリーマンを軽蔑してほしく無いのです。日本中のサラリーマンがゼネストを敢行したら、日本中の資本家は忽ち音をあげる筈になつてゐるのです。それほどの威力を持ちながら、毎日、黙々として働いてゐるサラリーマンの姿ほど、奥床しいものではありません。良識がある証拠です。立派なものです。⁽⁸⁵⁾

安月給に不満をこぼし、職場での人間関係に疲弊しながらも、生活のために「黙々として働いてゐる」サラリーマンたち。その姿に「奥床しいもの」を見ていた源氏は、彼らの日常をあたたかいユーモアにくるんで描き出した。では、こうしたサラリーマン小説に対し、BG小説にはどのような特徴が見られたのであろうか。オフィスワークに従事する被雇用者という点では、サラリーマンと女性事務員とは同じ立場にあると言える。しかしBG小説には、サラリーマン小説にあらわれていたような「ペーソス」を看取することはできない。もちろん、小説内では職場への不満を抱く姿も描かれてはいるし、彼女たちの給与は男性社員の半分程度に設定されているなど、労働条件は悪い場合が殆どである。にもかかわらず、彼女たちがサラリーマンのように悲哀を歎ずる場面は見られない。この違いは何を意味しているのか。

まず考えなければならないのは、当時の企業では男女の待遇差が半ば当然のものと思はれていた、という点である。占領下の様々な民主化改革の影響は企業組織にも及び、給与制度や昇進制度の単一化など、従業員の平等処遇に向けた改革が進められ、「建て前の上では、はじめて全従業員が単一の序列に組み込まれること」となつた⁽⁸⁶⁾。しかしこれはあくまで「建て前」であつて、女性たちは在日韓国・朝鮮人や臨時従業員などとともに、平等処遇の恩恵に与ることは出来なかつた。「男性従業員との処遇差別を当然とされたという意味で、女性従業員には企業内の民主主義がなかつた」のであ

り、賃金格差についても「妻子を養う」男の生活費に見合う賃金に、女をあずからせるということ自体が「論外」という発想のもとで正当化されていた²⁰⁾。

さらに、こうした差別的な待遇が当然視されたことで、女性事務員たちが構造的に「ペーソス」から遠ざけられていたと考えることも可能である。男性社員たちは出世の可能性を意識するからこそ多少の無理難題も引き受けざるを得ず、それゆえに先に見たような「ペーソス」が生じうる。一方、女性事務員たちは短期勤続が予定され出世競争から排除されているために、かえって上司の視線を気にすることなく振舞うことも可能となる。企業内における女性事務労働者の振舞い方を分析した小笠原裕子はこうした事態を「構造的劣位の優位性」と呼んでいるが²¹⁾、源氏のBG小説が悲哀を感じさせない点は、こうした事情も関係しているのではないだろうか。

それでは、「仕事上の悩みとか、対人関係の苦痛、仕事への生甲斐など」を描いたサラリーマン小説に対し、BG小説がテーマとしたものは何であったのか。井原あやはこれについて、「職場を舞台としながらも、およそ働いている様子は描かれない」代わりに、「誰からも愛される魅力あるBG」の姿とその恋愛模様が描かれる点こそが特徴である、と論じている²²⁾。井原の指摘する通り、女性事務員が職場での出会いを通じて魅力的なパートナーを見つけ結婚に至る、というプロットは源氏のBG小説で頻繁に採用されるものであり、その意味でこれらの作品は「職場恋愛II オフィスラブ小説」であると言ええる²³⁾。

「仕事上の悩み」を描くサラリーマン小説において、オフィスとはあくまで「仕事」の場として存在する。一方BG小説におけるオフィスとは社員同士の恋愛の舞台であって、そこで「仕事」の問題が浮上することは殆どない。オフィス表象をめぐるこうした対照性は、男性従業員だけを正規の構成員と見做し、女性従業員を劣位に置くことで成立していた戦後の企業組織と対応するものだった。また、「仕事」の代わりに「恋愛」が前景化した背後にも、同様の問題を見ること

ができる。もとより職場恋愛とは、「オフィスという公的空間と人間関係を使って、私的な恋愛を繰り広げる」ものである以上、「オフィスの濫用であり目的外使用」という性格を持っている⁸⁵。しかし、女性事務員たちはまさにその「目的」から排除されていたからこそ、「目的外使用」である「私的な恋愛」と結びつけられることになった。

ただし、源氏のBG小説の人氣は、まさにそれが〈オフィスラブ小説〉であったことに支えられてもいた。そもそも職場内での恋愛や結婚は、戦前までは殆どの企業において「ご法度か、或は危険（出世？ができぬ）を伴ったもの」として忌避されており⁸⁶、場合によっては餓首の事由にもなりえた。そのため、「昔は、堅く御法度だった社内恋愛が、今は堂々と行はれてゐる」という戦後の職場の風景は、それ自体が「民主主義的近代化」の達成を意味するものであり⁸⁷、「戦後のはじまりを生きた人々にとって最も身近で、かつ通俗的なレベルで感受された「民主主義」であったのだ⁸⁸。オフィスという空間を恋愛の舞台として描く源氏のBG小説は、こうした職場秩序の転換に即したものであった。

さらに、当時の人々にとって、職場恋愛は憧れの対象であったという点も重要である。一九五〇年代に刊行された恋愛指南書には、次のような記述がある。

一体、戦後、男女の交際は自由になったとはいふものの、まだ若い男女のための適切な社交機関をもたないわが国の現状では、そんなに誰も彼も、よりどりみどりの異性と交際するチャンスにめぐまれてはいるわけではない。すくなくとも、家庭にある娘さんたちは、親が先頭になつて、ボーイ・フレンドをかきあつめてでもこないかぎり、相かわらず、相手ほしさに、はかない夢を追っているのが普通だろう。ところが、その点、職場に働く娘さんたちは、だいぶちがつた事情のもとにある。／大ぜいの男性の中にたちまじつて働いていれば、いやでも応でも、男性と知り合い、親しくなるチャンスが多くなり、知り合った相手の中から、生涯の道づれにふさわしい理想的な相手を見つけ、恋愛が発生したとしても、きわめて自然な成行きである。⁸⁹

戦後になり自由恋愛が推奨されるようになったとはいえ、多くの人々にとってそれを実行に移す機会はまだまだ限られていた。そうしたなかで職場という空間は、「生涯の道づれにふさわしい理想的な相手」との出会いを可能にする貴重な場となっていたのである。また、「勤労人同士としての対等なつきあい」、「家の背景などにとらわれない関係から出発」することが可能であるという点においても、職場恋愛は理想的であった。大都市のオフィスで働く人々の恋愛模様を描き出した源氏のBG小説は、こうした自由恋愛への憧れを満たすものとしても受容されたのである。

本節ではサラリーマン小説との比較においてBG小説の特徴を概観してきたが、では、源氏が女性事務員と仕事との関係を全く描かなかつたかという点と、決してそうではない。むしろ最初のBG小説とされる「向日葵」では、彼女たちにとってオフィスでの労働はどのような意味を持つかというテーマが大きく取り上げられていた。問題とすべきは、そうした要素がその後の作品からは消失してしまった、という点であろう。次節からは一九五〇年代初頭の婦人雑誌の言説との照応を踏まえながら、「向日葵」に描かれた女性事務員たちの姿を分析していく。

二、BGたちにとっての〈お茶汲み〉とは

「向日葵」の主人公、藤野節子は二一歳の女性事務員である。勤め先の大阪化学工業株式会社は「一流会社が多く、活気に満ちている」「ビジネスセンター」である大阪・北浜にオフィスを構えており、そこに勤めているだけで「何んともなく颯爽とした近代性を身につけているような気持」にさせる企業だとされている。高校卒業後しばらくは家事の手伝いをしていた彼女が新入社員として入社した直後から物語は始まり、「弁慶」とあだ名される先輩社員・日立一平との恋愛を中心に、彼女のBG生活が描かれていく。二人の関係はなかなか進展を見せないが、最後には彼の方から結婚を申し込

まれ、幸福な結婚生活を予感させるところで物語は閉じられている。

掲載誌の『婦人生活』に設けられた読者投稿欄には、「いま連載中の「ひまわり娘」は私の会社でも非常に評判になっていますのよ」⁹⁰、「新年号からの源氏鶏太先生の「ひまわり娘」とても面白く次号が待ちどおしい」⁹¹、「大好きな婦人生活を手にして真先に読みますのが、「向日葵娘」です」といった声が寄せられており⁹²、読者からの評価は高かったものと考えられる。また「節子さんにいつも教えられ、私が節子さんだつたならと思うことが度々」という投稿からは⁹³、同世代の読者にとって節子の振る舞いは見習うべき模範として受け止められていたこともうかがえる。

誰からも愛されるような魅力に満ちた女性事務員が、最終的には意中の相手との結婚に至るといふ筋は、源氏のB G小説によく見られるものではある。ただし本稿で注目したいのは、主人公である節子にとって会社での仕事がどのような意味を持っていたのか、という点である。「阪急沿線の豊中」にある「敷地は八十坪、延建坪は三十坪、二階建て」という庭付き一戸建てに住み、サラリーマンの父、専業主婦の母、学生の弟と四人で暮らしているという彼女の家庭環境は、典型的な郊外在住中産階級のそれであるといえる。当時の女性たちの就職事情を取材した西清子「婦人の職業戦線」では、経済的な要因こそが女性労働者の増加をもたらしっていると説明されているが⁹⁴、少なくとも節子がそうしたケースにあてはまるとは考えられない。では、彼女は何を求めて勤めに出ていたのか。

まず、社内における彼女の立場について確認することから始めたい。縁故による採用ではなく正式な入社試験を経ての採用であることから、企業としては必要な労働力として彼女を迎え入れていると推測できる。しかし、その期待は決して正規の構成員に対するものではなく、彼女はあくまで男性社員の「アシスタントとして入社」したに過ぎなかった。そのため、節子は入社して一ヶ月が経過しても「仕事のことは勿論、社内の事情もさっぱりわからない」、「弁慶さんの指図がなければ、何ひとつ出来ない」という状況に置かれることとなる。仕事は「たいい書類の整理か、弁慶さんが乱暴な字

で書いた手紙を浄書すること」というように、彼女に与えられるのは補助的な業務ばかりであった。

こうした中で、「もし、お茶をいれることも、仕事のうちだとしたら、入社一カ月目の節子さん、自分から積極的にやれることは、これだけであつた」とあるように、彼女が上司からの指示によらず行える唯一の業務が、男性社員への「お茶汲み」だった。そして連載第一回では、このお茶汲みをめぐる社内の騒動が描かれており、そこでの記述は本作における女性事務員にとつての「仕事」を考へるうえで、非常に重要な位置を占めている。

ある日、年下の男性社員から「乱暴ないいかた」でお茶汲みを頼まれたことに腹を立てた女性事務員が「あたしは、会社へお茶くみに来てるのやありません」と答えたところ、「お茶をいれるのが女の仕事やないか」「男女同権は恐れいつたね。ロクに仕事も出来ないくせに」という侮辱を受ける。多くの女性事務員たちが「お茶くみに対する不平」を「大なり小なり、いだいていた」こともあり、これをきっかけに彼女たちは「男子社員の横暴は膺懲すべし」と立ち上がった。女性たちは「ロクに仕事も出来ない」のだから「女の仕事」である「お茶くみ」をしていればよい、という男性社員の主張は、女性事務員たちにとつて到底容認できるものではなかつたのである。「女事務員の地位」を向上させるため、彼女たちは「一致団結」して「お茶汲みストライキ」を決行するに至る。

ここで重要なのは、ストライキの直接的な契機は男性社員の「乱暴ないいかた」だったが、その根底には「お茶くみに対する不平」、つまり「お茶をいれるのが女の仕事」という慣習への抵抗が存在していた点である。彼女たちにとつては「お茶汲み」という仕事を分担させられること自体が、「男子社員の下に隷属」することを意味していた。そしてこの慣習をめぐる問題は、当時の女性たちが職場で直面する矛盾の象徴とされていたものであり、同時期の婦人雑誌には次のような女性事務員の声拾い上げられている。

馴れない暗い北向の事務所の堅い椅子が堅さを増していく思いだつた。翌朝から、侮辱されたような感情で、掃除

中の挙動を見られるのすら神経に障った。男性達は、出勤すると、すぐ新聞を読み出し、手伝うどころか邪魔をし、ひどいになると姿を見ている。サーとすまして、さてお茶を差し出す。昼食時間まで心づかいと称してお替えすると機嫌がいい。事務もすれば机に向っていることよりも立ち歩く方が多い。袋や紙を取って下さい、このものを左に移したり、十二時にはお総業の世話が待っているのである。ここ迄くると完全に幻滅の域に達する。客が来れば最上のサーヴィスとばかり、テーブルの点景として「お茶を下さい」と言葉がかかる。お茶ってそんなに大切なものかしら。(…)「お茶を入れること位さわぐ必要はないではないか、男性よりも手際よくできて美しいからするので、仕事の何分の一かの小さなことだ」それでいいのだろうか。人間として仕事をしたかったのに、女であることそのもの、女を誇張しなければ仕事がないなんて、ああ何んと大きな壁だろう。⁵³

ここで吐露されている不満が「お茶を入れること」という業務それ自体ではなく、それが「女の仕事」として押しつけられることに対し向けられたものであるのは明白であろう。個々人の能力や適性ではなく、性別によって業務が割り振られてしまう性別職務分離こそが問題とされているのだ。「向日葵娘」連載時の『婦人生活』に掲載された座談会でも、「やはり女の人の受持つことと、男の受持つ仕事の範囲ははつきりしている」、「男の方のやつているのを見えますと、私に出来そうなことも沢山あるのにやはりさせてくれない」というように⁵⁴、同様の不満を語る女性たちの姿が確認できる。そして、「事務職における女性の位置づけを象徴的に示すもの」として受けとめられていたお茶汲みの問題を⁵⁵、自らにとつて最初のB G小説で、しかも連載第一回というタイミシングで源氏が取り上げていることは、やはり重要な意味を持つてゐるだろう。

では、この問題は小説内でのように処理されているのか。まず注意すべきは、ストライキに立ちあがった女性事務員たちが、作中では決して好意的に描かれていないという点である（「ゼネスト」を敢行しない点にサラリーマンの「良識」

を見るのが源氏だった。意気上がる彼女たちとは対照的に、主人公である節子は「男女が平等であるためには、それも仕方がないのかもしれない」と考えつつも、「何か割り切れぬもの」を解消できないために、このストライキに同調することが出来ずにいた。そして「入社以来、はじめての疑問」を抱いた彼女は、その夜、父親と次のような会話を交わす。

「家庭にだって、男に向く仕事と、女に向く仕事があるように、会社だって、そうなんだ、と思っっています。お茶をいれるのも、その一例に過ぎないやないかしら？」

「うん、お父さんも同感だな。と、いつて、その厚生課の秋田君のような乱暴な口調で、おい、お茶をくれ、というのもしけない。それは慎しむべきだろう。しかし、お茶をいれるからといって、そのために、女が男より劣っているかのように意識するのは、間違っている、と思うな。それだったら、家でお母さんが炊事をしたり、お洗濯をしたりすることも、お父さんより劣っているからだ、というバカな結論になる。」

この会話では、「男に向く仕事」と「女に向く仕事」という区分は（自然なものであり、それは「男女同権」と矛盾するものではない、とされている。性別職務分離はあくまで水平的な差異に過ぎず、むしろそれを優劣の問題と勘違いして「女が男より劣っているかのように意識する」女性事務員たちの考えは「バカな結論」であると退けられるのである。さらにこの後、「会社では誰かがお茶くみをやらないと、結局能率に影響する」という父の言葉によって、「お茶くみ」は「誰かが」やらないと「能率」を損ってしまふ必要不可欠な仕事である以上、それを担当することは「隷属」を意味しない、という認識が強調されている。その結果、性別職務分離の差別性は不問に付され、問題は「乱暴な口調」のみに限定されてしまふ。

こうしてお茶汲みをめぐるトラブルは、女性事務員たちの不満の根底にあったはずの性別職務分離の問題ではなく、（態度）の問題として矮小化されることになる。しかし、「水平的職務分離」は経営の論理によって意識的に、あるいは慣行・

イメージによって無意識的に、「垂直的職務分離」に転化させられる」以上⁸⁶、こうした〈解決〉が欺瞞であることは言うまでもないだろう。事実、「もし、お茶をいれることも、仕事のうちだとしたら」という語り手の言葉自体が、「お茶くみ」は「仕事のうちだとしたら」という言葉で片づけられるような、補助的な業務に過ぎないことを示している。

ただこの作品が興味深いのは、一度は「男に向く仕事」／「女に向く仕事」という区分を〈自然〉なものとして受け入れていた節子が、その欺瞞に自ら気付く描写があることだ。

いま、節子さんの身うちに充滿しているものは、何かに自分の二十一歳の情熱を体当りでおつつけていきたい、という積極的な意欲であった。お茶くみも、そのひとつの現われであった。しかし、この世の中には、お茶くみ以上のものが、もつともつとたくさんあるはずだ。節子さんは早くその体当りでおつつかっていけるものに、めぐりあいたかった。もし、それにめぐりあった時、女は、お茶くみなんかに満足していられなくなるのではなからうか。こんどのお茶くみストライキが、かりにそんな意味のものであったとしたら、節子さんは大いに反省してみる必要があるのだ。

ここで彼女に芽生えているのは、「お茶くみ」を「女の仕事」として押しつける職場のジェンダー規範に対する疑問である。「体当りでおつつかっていけるもの」、「お茶くみ以上のもの」に対する期待は「お茶くみなんかに満足していられなくなるのではなからうか」という不安を呼び起こし、自身の振る舞いに対する「反省」を迫る。彼女が勤めに出た理由も、まさにこの期待ゆえであったと考えるべきであり、ここでの「反省」は、女性事務員たちにとって「仕事」とは何か、という問題へと彼女を導きうるものであるだろう。

しかし小説ではこの直後、「女が、お茶くみを拒否したら、それは、女らしさを失うことになる。男とかわらなくなることだ」という思いにとらわれる彼女の姿が捉えられ、性別職務分離に対する問い直しに歯止めがかけられることになる。

「お茶くみなんか満足以外にいらなくなる」未来を予測する中で、彼女は「お茶くみ」を「女の仕事」として割り当て、職場の秩序を踏み出ようとする。しかし同時に、「女らしさを失うこと」、「男とかわらなくなること」に対する怖れが、彼女を「女の仕事」へと踏みとどまらせるのである。では、この葛藤に対し、小説はどのような答えを提示したのか。次節ではこの問題についての考察を通じ、源氏のBG小説が〈オフィスラブ小説〉とならざるを得なかった背後にあるものを明らかにしていく。

三、「成長」の行方

お茶くみストライキの際、新入社員でありながらも周囲に流されずに孤塁を守つたために社内からの注目を集めることとなつた節子は、長期療養に入つた男性社員の代役として「職員押捺簿の整理」を任される。「多忙であると同時に、極めて慎重を要する仕事」を「まだ入社して間もない、しかも、女事務員」に担当させるといふ「大変な抜擢」は、「これがうまく成功したら、女にもどしどし一人前の仕事をやらせるように、会社の方針を変更してもいい」といふ、「女の能力についてのテストケース」という意味も持っていた。そしてこの「一人前の仕事」の経験は、それまでに味わつたことのないような充実感を彼女にもたらす。

しかし、今までの弁慶さんの補助的な仕事にくらべたら、入社三ヶ月目にして、しかも、男の社員がやってきたこの仕事は、決してなまやさしくはなかつた。それだけに、男が仕事に精魂を打ち込むように、節子さんにも、そんな気になれそうであつた。いつかの夜に感じた、二十一歳の自分の身のうちに充滿している、何かに体当りでぶつつかつていきたいという積極的な意欲の吐け口を、今はじめて見つけ出したような興奮を覚えた。しかし、どんなに多忙で

あろうと、女らしさを失わぬために、一時間毎の、弁慶さんのためにうまいお茶をいれてあげることだけは忘れまい、とも思った。

新たに担当する「男の社員がやっていた」仕事は、それまでの「補助的な仕事」に比べると困難ではあるが、それだけに達成感を与えるものでもあった。「何かに体当たりでぶつかっていきたいという積極的な意欲の吐け口を、今はじめて見つけ出したような興奮」は、彼女が勤めに出る際に抱いていた期待通りのものであったに違いない。しかし同時に、「男の社員」の仕事は「男が仕事に精魂を打ち込むよう」な働き方を要請するために、彼女は「お茶くみ」という「女の仕事」を通じ「女らしさ」をつくり上げなければならぬ。ここでは「女らしさ」なるものがなら本質的なものではなく構築されるものに過ぎないことが露呈しているが、「行為がなければ、ジェンダーもありえない」からこそ³⁹⁹、彼女は「女の仕事」を反復し続けることが求められるのである。性別職務分離の侵犯は、「女らしさを失うこと」への恐怖をつねに引き起こす。先に見た職業婦人の座談会でも、「私は女の人が社会へ進出したり、偉くなるとどうしても中性的な、男性的な感じになるようですが、あくまでも女らしさは保つて行きたい」と語る出席者の姿が確認できる⁴⁰⁰。

これについては、彼女たちが「進出」しようとした「社会」の問題にも目を向ける必要がある。当時の職場において女性たちに求められたのは、実務的な能力よりも「女らしさ」であったからだ。例えば職場での振る舞いを指南する雑誌記事では「いつも女性という意識の下に働いて」いることが必要であると説かれ⁴⁰¹、就職関連の記事も「どんな場合でも、職場の要求する女性は、健康でよく働く、素直で明るく、積極的で女らしい人のようです」と⁴⁰²、やはり読者に対し「女らしさ」を求める記述となっている。採用の時点から続くこうした眼差しを意識せざるを得ないからこそ、彼女たちは「女らしさを失うこと」を恐れるのである。

このように「向日葵」の前半では、仕事を通じて自らの能力を発揮したいという望みと、それを許さない職場のジェ

ンダー規範との間で悩む主人公の姿を通じ、当時の女性事務員たちが直面していた職場の矛盾が描かれている。では、こうした引き裂かれのなかで、節子はどのような答えにたどり着くのか。「弁慶」のフォローのもと、順調に仕事をこなしていく彼女は、やがて次のような考えをもつようになる。

節子さんは、やはり、嬉しかった。男社員のやっていた仕事を、女の自分にも、何んとかやれるのだ、ということが嬉しさも勿論であったが、それにもまして、こういう仕事を与えられたことも幸福であった。会社の仕事に、どれが重要であるかないかの差別をつけるのはおかしいことかもしれないが、お茶汲みに比較して、職印捺捺簿の整理の方が、すくなくともやり甲斐があった。やり甲斐があると感ずることによって、それだけよけいに熱中できるのである。熱中できる、ということは、自分の精神に充実を覚えることであつた。節子さんは会社の仕事を熱心にやることによつて、自分を成長させることが出来るのだ、と知つた。

注目すべきは、彼女がここで感じている喜びの内実である。「何かに体当りでぶつかつていきたいという積極的な意欲の吐け口」を求めていた彼女にとつて、「男社員のやっていた仕事を、女の自分にも、何んとかやれるのだ」というかたちで自身の実力を確認できたことは、当然大きな喜びとなるものだった。しかし彼女はそれ以上に、「こういう仕事を与えられたこと」、すなわち、会社から「一人前」に扱われたことに「幸福」を感じている。彼女にとっては、他者からの評価こそが決定的な意味を持つていたのである。

彼女がそれまで周囲に評価されてこなかつた、というわけでは決してない。むしろ作中では、彼女の魅力を語る男性社員たちの言葉が幾度も繰返されている。しかし、その賛辞が彼女の職務上の実力に向けられることは殆どなかつた。「あなたは大阪化学の恋人だ」、「わしの息子の嫁にしたいくらい」、「ありやアいい娘だ、芯が強くて、しかも、うわべは純情可憐、理想的な娘ですよ」というように、男性たちは彼女を「恋人」「嫁」「娘」として評価しているのであつて、「社

員」としての優秀さを認めていたわけではない。だからこそ、「男社員のやっていた仕事」の分担という形を通じて「一人前」の「社員」と認められたことは、彼女にとって大きな意味を持つのである。

さらに、「女の仕事」として与えられる補助的な業務とは異なり、「男社員のやっていた仕事」は「やり甲斐」をもたらしてくれる。それは（「男が仕事に精魂を打ち込む」ような）「熱中」を引き出し、そこからもたらされる精神的な充実は「自分を成長させる」養分ともなる。こうした「成長」の実感もまた彼女の喜びとなつてはいるが、しかし今回のような特別な事情がない限り、「成長」につながるような「一人前の仕事」が女性に割り振られることはない。この気付きは、（男の仕事）／（女の仕事」という区分に対する正面からの問い直しへと彼女を導いていく。

同じ時に入社した男と女が一年もすると、何んとなく差が出来てくるのは、男はそれによつて人格を向上させられるに足るような仕事を与えられるに反して、女にはいつまでたつても、お茶汲み程度の仕事しか与えられないところに、原因があるのでなからうか。勿論、お茶汲み程度の仕事をしていても、その心がけ次第で、人格の向上は可能であるに違いない。しかし、それは理屈であつて、平凡な人間にはやはりお茶汲み程度の仕事だけでは、そんな気持になれないようだ。

男性社員は「人格を向上させられるに足るような仕事」に携わることを通じて成長する機会が与えられるのに対し、「お茶汲み程度の仕事」しか与えられない女性社員たちは、その機会を奪われているのではないか。「女らしさ」が期待される現在の職場において、彼女たちが「女性の仕事」を拒むことは難しい。しかしその区分を問い直さない限り、男性との差別的な待遇は温存されるのではないか。「お茶汲み」は「女に向く仕事」であるとして性別職務分離を水平的なものとして受け止めていたかつての認識は、ここで完全に否定されているかに見える。では、これまで彼女を「女の仕事」に引き留めてきた、「女らしさを失うこと」への恐怖はどうなったのか。先の引用に続く部分を見てみたい。

その証拠に、家庭にあつても、いつも外で働く良人と、うちにあつて台所仕事や洗濯に追われ通しの妻とでは、長い年月の間に、しぜんに差がついてくるようである。過去の母や妻は、その差を、家庭への愛情の深さで補つてきた。しかし、これからの母や妻は、愛情の深さだけにたよつてはいけけないのではなからうか。母や妻も、良人と対等の人格を持つためには、もつと積極的にならねばならない。しかし、その具体的な解決策については、節子さんにも、いまだ思い及ばなかつた。同時に、それは節子さんの今後に課せられた大きな問題でもあつたらう。

ここで彼女は、職場で補助的な業務しか与えられない女性社員が成長の機会が奪われているのと同様、家事労働に追われ「うち」へと閉じ込められている妻・母も、やはり成長の機会を奪われているのではないかと考えを巡らせている。つまり、「男の仕事」／「女の仕事」という職場内の性別職務分離と、夫Ⅱ会社／妻Ⅱ家庭という性別役割分業との間に、同様の仕組みを見出したのである⁽⁸⁾。ただし、「母や妻も、良人と対等の人格を持つためには、もつと積極的にならねばならない」とあるように、その解決は女性側の〈意欲〉にゆだねられ、社会的な性差の構造に対する問いは回避されている。

しかしより重要な点は、職場の問題が家庭へと接続されることで、彼女の求めていた「成長」の意味に変化が生じていることである。ここでは「人格の向上」は「夫と対等の人格を持つため」、すなわち、より良く「家庭」を運営するためものものとされていることに注目したい。これ以前の場面では、「会社の仕事を熱心にやること」を通じて「成長」したいという彼女の希望が性別職務分離を踏み越えるものである以上、それはつねに「女らしさ」と背反するものとして位置付けられていた。だがここでは「成長」の行方が「家庭」へと向けられることで、つまり、「母や妻」としての「成長」へと再編されることで、それは「女らしさ」と対立するものではなくなつてきているのだ。幾度も浮上してきた「女らしさを失うこと」への恐怖がこの場面で描かれていない理由も、そこに求められよう。

職場経験の意義を「家庭」へと回収するこのような論理は、当時の婦人雑誌上にも見ることが出来る。「婦人生活」一九五二年五月号に掲載されている特集記事では、「変化がなく」「退屈」な「家庭」は「娘の夢と、生活感情を満足させるだけの魅力に乏しい」ところであるとして、職業に就いて「生きた生活を通して、生きた教養一つ一つ身につける」とをすすめている。だがそこで得られる「教養」は、あくまで「結婚」という目的に結びつけられるものであった。

自分も楽しみ、人もたのしませる——このことは、モダンな女性にとつて、だじじな生活技術です。あなたが結婚して家庭をもつたとき、そうした特技があなたの家庭を陽気で、楽しい場所にするでしょう。客あしらいが巧みで、人の微妙な心理をちやんと心得た愛らしいホステス（お主婦さん）……それは世間に出て働いた経験のある人に多いでしょう。⁴⁴

女性の職場経験は、あくまで「家庭を陽気で、楽しい場所」にするためのものとして意味づけられており、そこでは職業人としての「成長」の可能性は最初から排除されていた。このように「職場はよい家庭づくりに必要な能力を養う場」であるとすると、枠組みが形作られていくなかで、⁴⁵女性事務員たちは自らの「成長」を意味づけることが求められていたのである。

そして連載第六回に描かれたこの場面以降、彼女が「仕事」をめぐる問題について考える描写は見られなくなる。「今後に課せられた大きな問題」として先送りにされた「具体的な解決策」は放置されたまま、物語の焦点は節子と「弁慶」との恋愛に移行していく。そのなかで彼女を捉えるのは、「弁慶さんに愛される資格のある娘だろうか」という悩み、すなわち「妻」としてふさわしい女性に「成長」できるのか、という問題である。例えば連載後半に入った第九回では、次のように内省する彼女の姿が描かれている。

しかし、今日、節子さんの知ったことは、愛されることの難しさであった。愛されるといふことは死をも辞せぬ愛情

の深さだけではないのである。愛することによって、そして、愛されることによって、日に成長していかなければならないのだ。／そんなら、自分は、と節子さんは思うのであった。／弁慶さんを愛する心は、日に日に深まっていっている。しかし、弁慶さんに愛されるにふさわしい女として、日に日に、成長していつていられるであろうか。節子さんは、うなだれて、切なく溜息を洩らした。

ここでも彼女は自身の「成長」について考えを巡らせているが、それはあくまで「弁慶さんに愛されるにふさわしい女」へと向かう「成長」であって、そこには小説前半に見られたような性差への問い直しに向かうベクトルは存在しない。「女らしさ」と「成長」とを背馳させてきた性別職務分離の問題は、前景化してきた職場恋愛の背後に隠されてしまうのである。そして物語は、「君は、ほくものだよ」という「弁慶」のプロポーズによって閉じられている。節子が「愛されるにふさわしい女」として「成長」を遂げたことを意味するこの結末の裏では、小説前半で垣間見られていた別様の「成長」の可能性、その残骸が廃棄されている。

おわりに

「向日葵」の連載第五回には、会社の創立三十年を記念する社内行事として、社員による演劇上演の話が持ち上がる場面がある。脚本を担当した男性社員が「この題を思いついてから、筋を考えた」と誇るそのタイトルは、「女性の勝利」というものだった。作中で語られるところによれば、劇のあらすじは以下のようなものである。「金持の息子で会社の月給なんかどうでもよい」と考える「不真面目なサラリーマン」が「会社の女事務員」に恋をするものの、「あなたみたい不真面目なサラリーマンは大嫌いだ」と言われてしまう。「一念発起」した彼は、真面目なサラリーマンへと生まれ変

わり、無事二人は結ばれる。ここで「勝利」した「女性」とは誰なのか。それは当然、「不真面目なサラリーマン」を「一念発起」させることに成功した「会社の女事務員」であるだろう。自身に相応しい結婚相手を獲得し、安定した結婚生活を手に入れること。それが女性事務員たちにとつての「勝利」なのである。第二節で取り上げた「職場の二十娘の座談会」は、次のような司会の言葉で締めくくられている。

やっぱり政治もこれからの若い人達に期待するほかないのですから、若い世代の皆さんに大いに頑張つて頂きたいのです。それではこの上ともそれ／＼の職場で御奮闘なさるよう、又やがては幸福な結婚生活にゴールインなさるようお祈りして終ることにします。⁽⁴⁶⁾

先に見たように、この座談会の出席者からは職場のジェンダー差別に対する不満も語られており、その改善についても議論が及んでいた。だが、そうした彼女たちの「職場での御奮闘」は、あくまで「幸福な結婚生活」へと向かうものであり、それ以外の「ゴール」は想像すらされていなかった。

本稿では源氏のB G小説を取り上げ、彼のサラリーマン小説との比較や同時期の婦人雑誌言説との関係という視点から分析を行ってきた。オフィスを「仕事」の場として描くサラリーマン小説とは対照的に、B G小説に描かれるオフィスは基本的に職場恋愛の舞台として設定されており、女性事務員たちの労働の場面が描かれることは殆どない。こうしたオフィス表象の対照性は、男性従業員だけを正規の構成員とみなす戦後の企業慣習と合致するものであったといえる。一方で、それが近代的なオフィスを背景として繰り広げられる恋愛模様を描く〈オフィスラブ小説〉であったからこそ、源氏の小説は人々の広い支持を集めることにも成功していた。

ただし最初のB G小説である「向日葵娘」はその限りではなく、そこでは性別職務分離を踏み出ようとしながらも、「女

らしさ」を要請する職場秩序から逃れられずに葛藤する女性事務員たちの姿が描かれていた。二〇年以上の勤務経験をもち、事務労働の現場をよく知る現役サラリーマンでもあった源氏によつて、こうした作品が書かれた意味は大きい。たとえそれが最終的には「家庭」という領域に囲い込まれるものであったとしても、苦悩する女性事務員の姿を源氏が描いていたという事実は、この時点では未だ性別職務分離が（自然）なものとしては定着していなかったことを示唆している。そして侵犯の可能性が現実的な問題として認識されていたからこそ、その結びは「恋愛」によつて縫合されなければならなかったのだ。しかしこの時、女性事務員の「成長」の行方を限定させたものとは何だったのか。同時期に発表されたエッセイで、源氏は次のように書いている。

私の小説には、いわゆる作家の眼というものが感じられないであろうことは、私もちゃんと知っているのです。しかし、作家の眼のかわりに、社会人の眼がある筈なのです。私はこの社会人としての眼を、いよいよ健康なものにしていきたいと努力し、大切にしていきたい、と思つていきます。社会人の眼で書いた小説が、文学として価値があるかないか。そんなことは、私の知ったことではありません。しかし、私は百万人の読者に訴えるには、どうしても、健康な社会人の眼で眺めた小説でなければならぬと思つています。⁴⁷⁾

源氏の「健康な社会人の眼」は、女性事務員たちが直面していた矛盾の一端を捉え得るものだった。だがその「健康」さゆえ、既存の枠組みを越え出ることもなかったのである。

そして「向日葵」に示された恋愛の前景化は、職場内での恋愛・結婚を巧みに取り込むことでその労務管理を完成させていく企業の動きを先取るものでもあった。日本における結婚形態の主流が見合い結婚から恋愛結婚へと移行したのは一九六〇年代後半であるが、戦後一貫して続いたこのトレンドの背後には職縁結婚の増加があった。そしてそれを構造的に支えていたのが、労働力としてではなく男性従業員の配偶者候補として女性従業員を位置づける「マッチング・メー

カーとしての企業社会」の存在である⁽⁴⁹⁾。高度経済成長が本格化する一九五〇年代半ば以降、経営合理化の推進を目指す企業では結婚退職や若年定年などの制度化が進み⁽⁵⁰⁾、短期勤続へと追い込まれた女性従業員たちの待遇差別は「自然」なものとして処理されていく。こうした企業の論理を、その「健康な社会人の眼」によりいち早く察知することで、源氏のBG小説は成立していたのである。

(1) 田中孝一郎『新しい外来語の字引』（実業之日本社、一九二四）。

(2) 竹内洋「サラリーマンという社会的表徴」（井上俊ほか編『日本文化の社会学』岩波書店、一九九六）。

(3) 発行元は長谷川国雄（元『実業之世界』編集者）が創業したサラリーマン社。この雑誌については、田中秀臣・中村宗悦「忘れられた経済雑誌『サラリーマン』と長谷川国雄」（『上武大学商学部紀要』一〇巻二号、一九九九・二）及び同「雑誌『サラリーマン』と『時局新聞』におけるジャーナリズム批判」（『メディア史研究』九号、二〇〇〇・三）を参照。

(4) 浅原六朗「文学的自叙伝」（『新潮』一九三五・一〇）。

(5) 源氏鶏太『夏雲冬雲 私の履歴書』（日本経済新聞社、一九七六）。

(6) 源氏鶏太『わが文壇的自叙伝』（集英社、一九七五）。

(7) 「BG（ビジネス・ガール）」という語が雑誌メディアで見られるようになるのは一九五〇年代後半からであり、それ以前は「サラリーガール」や「サラリー・ウーマン」といった語が用いられていた。そして東京オリピック前後、この言葉は「OL（オフィス・レディ）」へと置き換えられていく。

(8) 源氏鶏太「あとがき」（『源氏鶏太全集2』講談社、一九六六）。なお、「向日葵娘」の本文引用は全てこの全集に拠る。

- (9) 金野美奈子『OLの創造 意味世界としてのジェンダー』（勁草書房、二〇〇〇）。
- (10) 井原あや「源氏鶏太「銀座立志伝」論」（『相模国文』四三号、二〇一六・三）、同「『女性自身』と源氏鶏太―〈ガール〉はいかにして働くか―」（『国語と国文学』九四巻五号、二〇一七・五）。
- (11) 金岡直子「源氏鶏太「青空娘」論―ロマンス小説のリアリティー―」（『論潮』一一号、二〇一八・七）。
- (12) 熊沢誠『新編 日本の労働者像』（ちくま学芸文庫、一九九三）。
- (13) 斎藤駿「源氏鶏太と〈私〉」（『思想の科学』一九七五・三）。
- (14) 鈴木貴宇「明朗サラリーマン小説」の構造―源氏鶏太『三等重役』論（『Intelligence』一二号、二〇二二・三）。
- (15) 源氏の初期小説における『三等重役』の特異性については、拙稿「二重化された〈戦後〉―源氏鶏太『三等重役』論―」（『日本文学』六四巻二号、二〇一五・二）を参照。
- (16) 川口松太郎「飽くまで新人を」（『オール読物』一九五一・一〇）。
- (17) 小島政二郎「源氏鶏太君とペーソス」（『オール読物』一九五一・一〇）。
- (18) 源氏鶏太「サラリーマン十戒」（『オール読物』一九五二・三）。
- (19) アンドルー・ゴードン『日本労使関係史 1853―2010』（二村一夫訳、岩波書店、二〇二二）。
- (20) 遠藤公嗣「労働組合と民主主義」（中村政則ほか編『戦後民主主義』岩波書店、一九九五）。
- (21) 大沢真理「企業中心社会を超えて―現代日本を〈ジェンダー〉で読む」（岩波現代文庫、二〇二〇）。
- (22) 小笠原裕子『OLたちの〈レジスタンス〉 サラリーマンとOLのパワーゲーム』（中公新書、一九九八）。もちろん、こうした「抵抗」が結果的には既存の性別役割を再生産してしまう恐れがあることも、小笠原は正確に指摘している。
- (23) 前掲井原あや「『女性自身』と源氏鶏太」。

24 『二等重役』など職場恋愛をプロットに組み込んだサラリーマン小説も存在するが、BG小説はその比重が極めて大きなものとなっている点が特徴である。

25 西口想『なぜオフィスでラブなのか』（堀之内出版、二〇一九）。

26 大和勇三『サラリーマン考現学』（『日曜日』一九五二・二）。

27 高見順『サラリーマンの実態』（『世界』一九五二・一二）。

28 前掲鈴木貴宇『明朗サラリーマン小説』の構造」。

29 原奎一郎『恋愛実技』（鱗書房、一九五五）。

30 「読者の頁 わが社の弁慶さんひまわり娘は？」（『婦人生活』一九五二・三）。

31 「読者の頁 藤野節子さんへ」（『婦人生活』一九五二・三）。

32 「読者の頁 大評判のひまわり娘」（『婦人生活』一九五二・四）。

33 「読者の頁 ひまわり娘ファン」（『婦人生活』一九五二・二）。なおこの投稿に対して、編集部からは「ひまわり娘ファンの方よりたくさんお手紙が参つております」という返答がつけられている。

34 西清子『婦人の職業戦線』（『婦人公論』一九五二・一一）。

35 井出茂子『後輩の人達へ』（『婦人公論』一九五二・一一）。

36 座談会「職場の二十娘の座談会」（『婦人生活』一九五二・六）。

37 前掲金野美奈子『OLの創造』。金野によれば、お茶汲みという業務が〈女性性〉と結び付けられるようになったのは、戦後になってからのことだという。

38 熊沢誠『女性労働と企業社会』（岩波新書、二〇〇〇）。

89 ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブルーフェミニズムとアイデンティティの攪乱ー新装版』（竹村和子訳、青土社、二〇一八）。

60 前掲座談会「職場の二十娘の座談会」。

41 澁澤多歌子「職場の会話のエチケツト」（『婦人生活』一九五二・四）。

42 「就職試験に必ず成功する秘訣公開」（『婦人生活』一九五二・一一）。

43 家事労働が果たして〈補助的な業務〉と言えるのか、という問題は存在する。賃労働だけを特別視する考え方もまた、性差別の温床になってきたことは言うまでもない。

44 鳴海碧子「職場はあなたの幸運のプール」（『婦人生活』一九五二・五）。

45 前掲金野美奈子『OLの創造』。

46 前掲座談会「職場の二十娘の座談会」。

47 源氏鶏太「私の小説について」。初出未詳、引用は源氏鶏太『統一等サラリーマン』（要書房、一九五二）より。

48 今泉洋子・金子隆一「配偶者選択の現状」（『人口問題研究』一七三号、一九八五・一）。

49 岩澤美帆・三田房美「職縁結婚の盛衰と未婚化の進展」（『日本労働研究雑誌』五三五号、二〇〇五・一）。

50 伊藤康子「戦後改革と婦人解放」（『女性史総合研究会編『日本女性史5 現代』東京大学出版会、一九八二）。